

八木健に学ぶ滑稽俳句 12

高橋 素子

うごくお花見吊革につかまつて 八木健

我国は草もさくらを咲きにけり 小林一茶

名所を問わず国の隅々まで、花の雲に覆われてピンク一色、春が進る素晴らしい季節が今年もやって来た。桜は国花に相応しく日本人の心情の中に深く息づいている。花の開花前線にそって毎日のように、各家のテレビ画面にさえ桜が咲き乱れている。掲出の師・八木健の滑稽句の如く、通勤電車に乗ってのお花見もこれまた一興であり、一茶の句の様に我家の庭にも「桜草」が所狭しと咲き乱れる。つくづく、この国に生まれて良かったと思う。

ねがはくは花の下にて春死なん その如月のもち月の頃
西行

桜の樹の下にて春死にたいと、願った西行。この西行の辞世の歌を意識して、うっかり花の陰で寝てそのまま往生なんてとんでもないと、句にした一茶。

花の陰寝まじ未来が恐ろしき 一茶

季語「桜（花）」を詠んでもひと様々で面白い。

「三日見ぬ間の桜かな」ではないが、無粋な風雨によって、はかなく散るこの花を惜しんで、古今にも様々な句が詠まれている。

ちるさくら海あおければ海へちる 高屋窓秋

散るさくら一途に先をあらそへる 八木健

高屋窓秋の生きた時代を考慮すると、「ちるさくら」が自身を、また他の人を暗示しているとも解釈出来るが、一般には、白い花びらが青い海に魅せられて散ってゆく感覚的な句と解する。「この句は〈ちるさくら〉で切ることによって、読者は青い海へ散る白い花びらをイメージし、その想像が広がるのです。その色の際立った対照が目には浮かんで来るのです」と、師匠は語る。

師・八木健の句は、上五で切って、中七以降は思い込みを詠んだ擬人化の滑稽句である。「人生を重ね合わせたからこそ思い込みの表現となったのだ」と、師匠は著書「八木健のすらすら俳句術（岳陽舎）」の中で語っている。

師に倣って私も「散る桜」を詠んでみる。

この雨や心ならずも花散らす 素子

続けて、古今の名句と師匠・八木健の句の比較により、滑稽句の学習を深めていきたい。

ひく波の跡美しや櫻貝

松本たかし

さくら貝プラトニックラブの浜

八木健

次の波が寄せるまでのほんの束の間、渚に波が残していった淡い紅色の櫻貝。松本たかしの句は、この一片の櫻貝から、一瞬の静かさと清らかさが読み手の心の隅々まで広がって、名句となっている。

師・八木健の句は、「さくらの花びらが海に舞いおり、変身したのがさくら貝」と言われているようで、淡い紅色の櫻貝は誰の目にも清純そのものである。そのさくら貝の清らかさには、手をつなぐ関係だけのプラトニックな若いふたりの愛が相応しい。だが「さくら貝も生殖活動をする。だからこの若い男女にも、やがて赤ちゃんが……。まずはめでたい」等と、著書「八木健の皆さん、俳句ですよ」（発行・晴耕雨読）の中で、想像を広げてみせ、読者を笑わせてくれる。

桜散るあなたも河馬になりなさい

坪内稔典

うめですかさくらですかこの裸木は 八木健

いずれも、話すようにつくられた句である。坪内稔典の句は、日本の美や精神の象徴になっている桜を、悠長に見える河馬と取り合わせによって対比している。「この世のあわただしさを忘れる為には、河馬になることが人には時に必要だ」とまで語っている。『「桜の樹の下には屍体が埋まっている」と言ったのは梶井基次郎だが、桜と死体を取り合わせたことで、桜の意外に不気味な一面がはじめて見えてきた。「取り合わせ」は私たち

の物の見方を変えてくれる』と、坪内稔典は著書「季語集」（岩波新書）のなかで述べている。

師・八木健の句も、吟行でのこと、梅のようにも桜のようにも見える裸木を囲んで、俳人たちが「うめですかさくらですか」と騒いでいるそのままを詠んで、高得点の佳句になったそうだ。「八木流滑稽俳句術」のひとつである。

茎右往左往菓子器のさくらんぼ 高浜虚子

さくらんぼ試食したので買ふはめに 八木健

虚子の句は、菓子器に盛られたさくらんぼの柄がてんでに、右に向いたり左に向いたりしている。その柄が動くはずはもとよりないが、それがふと感覚的に訴えてきたまを詠んだ、虚子・七三歳の作である。一瞬思考を停止して、眼界の事物を無心に受け止める、虚子の有力な写生の方法である。

師・八木健の句は、「デパ地下や商店街で売り子の口に乘せられて、つい試食してしまったものの、買わずにその場を逃げ出すのが難しい状態に追い込まれる。そこに可笑しさがある」と、師匠は語る。

誰にでも経験のありそうな話である。